

フィリップ・ポンス 日本への視座 : Misere et crime
au Japonを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005759

フィリップ・ポンス 日本への視座 —*Misère et crime au Japon*を中心に—

安 永 愛

はじめに

異郷住まいは、人を否応なく一人の観察者に仕立てあげる。日本を異郷として生きた人々の残した観察が、思わぬ仕方で国のありように新たな光を投げかけることは、決して稀ではない。概して日本人は日本論や日本人論を好む傾向があるとの指摘はしばしばなされ、殊に他者（他国）の目に映る自己（自国）を確認することにナルシスティックな快感を抱いたり、逆に過度なコンプレックスを抱いたりする例は枚挙に暇がない。しかし、そうした自尊感情だのコンプレックスだのとはできるだけ無縁に、他者の語る日本像や日本人論に虚心に耳を傾けてみることも、時に必要なことだろう。

本稿においては、1942年にパリに生まれ、「ル・モンド」の極東特派員として長く東京に暮らすフィリップ・ポンス Philippe Pons の著作 *Misère et crime au Japon du XVIIe siècle à nos jours* (Paris, Gallimard, 1999)¹ に焦点を当て、日本の観察者たるポンスのまなざしの特質について考察し、多くの日本人が正視しなかった諸側面に思いを致すとともに、ポンスの日本理解の根底にある普遍的な「人間理解」のありように視線を投げかけていきたい。

1. フィリップ・ポンスの道程

フィリップ・ポンスは幼少期をパリとフィレンツェで過ごした。哲学を修め

¹ 原著名を直訳すると「日本の貧窮と犯罪—17世紀から現代まで」となる。邦訳 フィリップ・ポンス著・安永愛訳『裏社会の日本史』筑摩書房、2006年。拙訳に付した「訳者あとがき」（396—403頁）において、フィリップ・ポンスの略歴、本書の位置づけと意義について解説を試みている。更に凝縮された書評として筑摩書房の広報誌『ちくま』No.423（2006年6月）に「人間の最も暗鬱な領域へ—ル・モンド記者の日本論」と題した記事を寄稿した（18—19頁）。本論文は、新たに判明したフィリップ・ポンスの履歴や、訳書刊行後の日本の情勢の変化も踏まえつつ、改めて本ポンス著の意義について再考を試みるものである。

演劇への志向を抱きつつも、「親を安心させるため」1967年から1969年にかけてソルボンヌ大学にて、政治学や法学、社会学を学び、かたわらジャック・ラカンのセミナーに出席していたという。68年の五月革命を経験し、ダニエル・コーン＝ベンディット率いる左翼グループのメンバーになる。父権的、帝国主義的、ブルジョワ的などとされた旧来の価値観への広範な異議申し立て運動の渦中にありながら、ポンスはこうした「抗議」の形にも自己を託すことができず、一度、イデオロギーや政治運動と縁を切り、自分の中の全ての価値のヒエラルキーを御破算にしたいという思いから、西欧社会からのエクソダスがポンスの希望となっていく。できるだけ自分の住む世界から隔たった場所に身を置き、もう一度すべてを考え直すこと。それがポンスの切実な願いだった。ポンスはニューヨークで能を観て感銘を受け、パリの東洋語学校で日本語を学ぶ²。

ポンスが初めて日本を訪れたのは1970年のことである。日仏会館の研究者としての来日であった。この渋沢栄一が創設した日仏会館の歴代の研究員には、ルネ・シフェール、ベルナール・フランク、ジャクリヌ・ピジョー、オーギュスタン・ベルクらが名を連ねている。人文・社会・自然系の第一線のフランス人研究者が籍を置くこの学際的な環境は、ポンスにとって日本研究の最良の出発点になった。ポンスは、東洋語学校時代、そして1970年から1972年にかけての研究員時代に、日本研究のキャノンとされるものを消化し、第一線の研究者たち³の日本への関心を共有することになる。

しかし、特筆されるべきは、ポンスがおそらくは無意識に選びとった方法として、旺盛に現地に足を運ぶ経験を重ねたことであろう。ポンスの著作の多くは、日本の街路を徘徊する経験なしには書かれ得なかったテキストである。ポンスは街、ことに東京を旺盛に歩くとともに、街で見かける様々な指標から、

² フィリップ・ポンスは自らの履歴について多くを語っていないが、東京にあるリセ・フランコ・ジャポネLycée Franco-Japonaisの生徒たちのインタビューに答え、例外的に自らの道程について公けにしている。本節においては、そのインタビューをもとに書かれた記事「フィリップポンスの内的世界」《Le monde intérieur de Philippe Pons》([http://www.scolafrance.info/parolesdespresse/documents/asie/japon.Portrait de Philippe Pons.pdf](http://www.scolafrance.info/parolesdespresse/documents/asie/japon.Portrait%20de%20Philippe%20Pons.pdf).)に多くを負っている。尚、この記事は、世界各地に存在するフランス系の学校40校150グループが参加した「報道のことば」国際コンクール(Concours international Paroles de Presse)のリセ部門において、最優秀賞を獲得しちえる。コンクールの課題は、フランス国外で活躍するジャーナリストのポートレートを書くというものであった。

³ ポンスの著作には、膨大な日本関連文献の読解の跡が刻まれているが、文献の選択の確かさは特筆に値する。パリ東洋語学校での修養の成果もさることながら、日仏会館において各分野の専門家の同僚や歴代の研究員の業績に触れ、文献についての情報を得やすい立場にあったことも、その理由の一端であろう。

それにまつわる書物へと直ちに導かれている。そして、書を読むと、その現場へ、街に誘われることになるのである。ポンスの日本体験においては、街を歩くことと、書を読むことの間に循環作用が成立していることが認められる。フィリップ・ポンスは外国人という立場を生かしているのでもあろうが、臆せず人に会いにゆき、人の話に耳を傾けている。また、知識人的な正統派の教養とされるものと、大衆文化とされるものとの間に価値のヒエラルキーを設けないのもポンスの特質である。いわば、ハイ・カルチャーとサブ・カルチャーの垣根を自由に行き来しているのである。類い稀と言ってよい知的膂力で、高度に学術的な著作をも咀嚼するが、市井の読書人の愉悦の世界にもゆったりと遊ぶ。要は、身一つをたずさえ、好奇心に導かれるまま、日本というフィールドを歩き、読み、彼なりの日本解説の格子を築き上げていったのである。

ポンスは日仏会館の研究員の任期を終え、1975年、ル・モンドの極東特派員に転身する。フランス帰国後、様々な媒体で日本関連の記事を請け負ううちに、ル・モンド社から誘いがかかったという経緯だという。ポンスは1981年より5年間のローマ支局勤務をはさみ、1985年より極東特派員として東京に居を定めている。極東特派員とは、特権的な立場であるようにも思われるし、ポンスの日本記事は、菅見する限り事実連関が心憎いまでに踏まえられた分析力ある行き届いたものが多いのだが⁴、ポンス自身は、ジャーナリズムの中で、フランス人の関心のフレームに合わせ日々新たに日本像を提供することに、少なからぬストレスを感じているという⁵。ポンスは、日々の報道に追われる多忙な特派員としての活動に並行させ、長期的なテーマを持ち日本についての本を纏めていくことを、いわば、ひとつの実存的な必要としているのである。

⁴ 「ル・モンド」*Le monde*はフランスにおいては中道左派のクオリティー・ペーパーとして位置づけられている。フランス国内の有力全国紙として、他に保守層を読者とする「フィガロ」*Figaro*、サルトルを創始者とし、比較的若い左派の読者層を持つ「リベラシオン」*Libération*がある。フランスの中道左派の観点からすると、例えば日本の自由民主党は、国粋主義的傾向を持つと見なされている。社会民主主義的色彩の濃いヨーロッパにあつては、中道といっても、実際はむしろ日本の左派に近い位置取りである。また「ル・モンド」は知識人を読者層の中核に持つだけに、概してポピュリズム的な傾向に対する批判意識は鋭い。例えば、映画なら「三丁目の夕日」が好きだと言い、下町の店先で煎餅をかじってみせるパフォーマンスで国民に好意的に受け止められている様子の当時の首相安倍晋三についてフィリップ・ポンスは「煎餅をかじるBCBG (Bon genre Bon Chic)」と皮肉ってみせている。

⁵ ポンスは、記事が大幅に削除されたり、自身が用意したのとは正反対のニュアンスのキャプションが、フランス人読者の期待に応じて最終的に付けられた例などについて語っている。前掲記事《*Le monde intérieur de Philippe Pons*》参照。

2. 日本論のキャンノンへの疑問を出発点として

イデオロギーや政治と縁を切り、自らの価値観を御破算にしようとの切羽詰まった思いで、ひとたび西欧世界からのエクソダスを果たしたポンスは、目前に広がる日本という対象を虚心に捉えようと努めることで、自らの価値観を再構築しようとしたのかも知れない。ポンスにとって日本についての学びが、単なる教養主義やオリエンタリズムに終始するはずはなかった。ポンスは虚心に学ぶが、日本論のキャンノンとされるものへの疑問も積もらせていく。

ポンスによれば、中根千枝の『タテ社会の人間関係』は、スタティックな支配的倫理を引き出すことで、少数派を無視する結果に繋がっているという⁶。また、ルース・ベネディクトの『菊と刀』や丸山眞男の日本論の一面については、武士の論理や倫理は、実はそれほど明治以降の日本を決定する支配的な要因であったとは考えられないとして距離を置いている⁷。このような日本論のキャンノンへの違和感からポンスのうちに生まれてきたのが、江戸の庶民文化の活力とその近代における残像と継承の様相に対する興味であり、日本的とされるものの常数・すなわち趨勢や多数派を捉える方法から身を引きはがし、詳細な観察を積み重ね、事実の特徴的な細部を概念的な構造の中で捉え直そうとする視線である。かくして、ポンスにとって初めての本格的な大著『江戸から東京へ』*D'Edo à Tokyo: Mémoires et modernités*, (Paris, Gallimard, 1988)⁸である。ポンスはこの著作において、街歩きと書物の読解、そして市井の人々へのインタビューの成果を組み合わせる方法を最大限に駆使している。本書は、日本の風俗と習俗の深奥に分け入ってこそ得られた興味深い細部を、江戸以来の庶民文化の豊かな水脈の中に位置づけた研究書であるが、武士の生真面目な美学とは違った、庶民の猥雑なエネルギーや反骨の流儀が書き留められた風俗・習俗研究の趣きがある。

⁶ *D'Edo à Tokyo, mémoires et modernités*, Paris, Gallimard, 1988, p.12

⁷ ただし、フィリップ・ポンスは、丸山眞男とは個人的に面識を得ており、氏の書物から多くを学んでいる。ポンスは、丸山についての卓抜な人物評さえ残しており、竹内洋著の『丸山眞男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書、2005年）の冒頭に、丸山のプロフィール紹介として引用されている。

⁸ 邦訳 フィリップ・ポンス著 神谷幹夫訳『江戸から東京へ 町人文化と庶民文化』筑摩書房、1992年

この書物から11年を経て公刊されたのが、本稿においてテーマの中心とする *Misère et crime au Japon* である。前著『江戸から東京へ』が庶民のエネルギーの溢れ返るポップなコラージュであったとすれば、本著は、興味の対象が、「庶民」からさらに日本社会の周縁の人々へと移動し、「下層」や「裏社会」とされる場に測鉛を降ろし、黙され秘されてきた営みに目を向ける、凝視の書物であるといっていよう。読解の対象とされる書物も量を増し、読解もさらに緻密になっている。決して物見遊山のような態度では向き合えない厳しい現場に足を運び、危険なインタビューも試みている。本書の構想にあたってポンスは、前著にも増して著作の方法論に関する自覚を深めているように思われる。

本著は、冒頭に述べられているとおり日本における「下層の人々」と「やくざ」についての本であり、ポンス自身にとっては知的関心の赴くままに選びとったテーマであるとはいえ、公刊するからには（そして日本語への翻訳も想定するからには）、あえて社会のタブーとされている問題に触れる必然性、正当性について、自問自答せざるをえなかったはずである。本書における方法論的な自覚の深まりは、テーマそのものの持つタブーに深く関わっていると推測される。日本論のキャノンの理解から始まって、ポンスは、日本人自身がタブーとしてきた問題に切り込む段階に至ったのである。

3. *Misère et crime au Japon* の方法論

前著『江戸から東京へ』において、方法論とされていたのは、日本的とされるものの常数（すなわち、趨勢・多数派）というものに還元することなく、江戸期と現代の日本の庶民の活力と美学を描くことであり、武士的価値が近代日本を形作った以上に江戸の庶民的なものが明治以降の日本を規定しているとの仮説の検証を試みることであった。本著 *Misère et crime au Japon* における方法論的課題は、趨勢・多数派、一般論に還元しない、という以上の命題を更に進め、あるいは展開させて、「周縁的な現象や、掟の侵犯現象こそが、当該の社会全体をよりよく説明しうる」という観点に立つことであったと言ってよい。一般性や趨勢を描写する誘惑を断ち切り、周縁的で個別的な現象に視線を注ぐことこそが真の社会理解に繋がる、という発想の転換が背後にある。ポンスは「日本人論」という一般的な観点は放棄し、日本の「下層の人々」と「やくざ」に照準することで、日本社会を影のように浮かび上がらせようとしたのである。

こうした周縁的なもの、例外的なものへの着目は、フランスひいてはヨーロッパの文化歴史研究の遺産を引き継ぐものでもある。本書の中でポンスは、ルイ・

シュヴァリエ『労働階級と危険な階級』『犯罪と歓楽のモンマルトル⁹』、ブロニスワフ・ゲレメク『14世紀から15世紀にかけてのパリの周縁民』、『憐れみと縛り首—ヨーロッパ史の中の貧民¹⁰』、ミシェル・フーコー『狂気の歴史』、『監獄の誕生¹¹』といった書物に言及しており、日本の現象に取り組むにあたって、こうした怜悯な分析力を有する浩瀚な書物の方法論は、ポンスの本研究の導きになっただろうことが想像される。以上に挙げた書物は、いずれも、政治的断罪を下すのではなく、人間社会の裏側の側面をも一種の生態学、社会の生理学として捉える視点が備わっている。教養主義的で美的な玩弄物としての日本像への疑問、そして支配的パラメーターを導き出そうとする方法論の権力性への懸念あってこそ、ポンスは本書執筆にあたってヨーロッパの文化歴史研究に範を取ろうとしたのであろう。また、以上に挙げた書物は、事実を冷静に積み重ねていくことから生まれる迫力、圧倒的な書物の物量感をいずれも備えているが、本著のボリューム¹²もその条件を満たしている。そうした記述の量と厚みの醸す説得力を、ポンスは数々の浩瀚な文化研究書から学び取っていたと考えられる。

ポンスは本書において、二種の「周縁の人々」に着目している。一方が、被差別身分や社会的・経済的落伍に由来する「受動的な（不如意の）周縁性」の人々であり、これに該当するのが中世の賤民、えた、非人、江戸の人足、明治維新後のプロレタリアート、現代の路上生活者たちである。そしてもう一方が実存的選択によって周縁的な存在となった「能動的周縁性」の人々であり、江戸時代の義賊や博徒、近代以降のやくざ、テキヤ、露天商といった存在である。このような二種の「周縁」を一望の下に収める視点を本書は有しているのであるが、その企て自体が、現代日本における標準的感覚からすれば多分に挑発的なものと映る。両者ともに「周縁的」な存在であることを形式論理的には理解できても、両者を一括りにすることに違和感を抱くのが、おそらく現代日本に

⁹ Louis Chevalier, *Classes laborieuses, classe dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle*, Paris, Plon, 1958, *Montmartre du plaisir et du crime*, Paris, Robert Laffont, 1980.

¹⁰ Bronislaw Geremek, *Les Marginaux parisiens aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris, Flammarion, 1976, *La Potence ou la pitié: L'Europe et les pauvres du Moyen Age à nos jours*, Paris, Gallimard, 1987.

¹¹ Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, Plon, 1961, *Surveiller et punir*, Paris, Gallimard, 1975.

¹² フランス語原著は551頁。

生きる人間の標準的な反応であると思われるからだ¹³。前者は差別の被害者、あるいは貧苦に打ちひしがれる同情すべき人々であると考えられているのに対し、後者は脅威であったり、軽蔑の対象であったり、時に憧れの対象であったりする存在であり、前者と後者を「周縁的」であるという一点で一括して捉える視点は、おそらく感情的な尺度が許さないのだ。事実、日本において、例えば被差別民について、あるいは露天商について、といった個別研究は数多いが、本書のような二種の周縁性にまたがる研究書は見当たらない。ポンス氏の二種の周縁性に対する注目は、感情の論理に籠絡されず、徹底した客観化と相対化の視点で日本社会を捉えようとした帰結である。本書は、二種の周縁性を一望の下に収めることによって、読者に、感情の尺度や倫理的裁断から自由になることを、すなわち一種のエポケーを要求し、二種の周縁性をつなぐものを見出だすよう促している。二種の周縁性を見据えることで、日本社会のありようをより輻輳的に捉えようとしているのである。

4. ポンスが見つめた日本の「貧苦」

本節においては、「受動的周縁性」に向けられたポンスの眼差しのありようについて考察していきたい。二部構成からなる本書の第一部を構成するのが日本における被差別民と貧民に関する記述である。「穢れ」思想の帰結として良民と区別された「賤民」の категорияが生じた中世。厳格な身分制によって、士農工商の埒外に置かれた被差別民が虐げられるとともに、被差別民が独自の社会を形成し、弾左衛門と呼ばれるリーダーも生まれた徳川時代。国家としての陣容を備えるべく急発展する陰で多くの労働者たちが過酷な状況に置かれ、身分解放令にも関わらず、被差別民がますます厳しい差別にさらされたたていた富国強兵の時代。日雇い労働者や路上生活者の集まる山谷や釜が崎に象徴される現代。ポンスは膨大な文献を読み解き、現地探索も行いつつ、日本の貧苦の歴史

¹³ 本書邦題をめぐっては議論があった。当初、編集者の岩川哲司氏の提案により「影の日本史」のタイトルが予定されていたが、校正段階の編集会議において、このタイトルでは内容をアピールできないとして却下され、「裏社会の日本史」のタイトルが選択された。「裏社会」の語感ポンスの言う「能動的周縁性」に強く結びついているが「受動的（不如意の）周縁性」を含みこむものとは考えにくかったため、訳者としてはタイトル変更抵抗を覚え、「影の日本史」のタイトルでの出版を望む旨、編集部へ文書まで送ったのであるが、「受動的周縁性」が「社会の中で光を当てられてこなかった」事態を、「裏社会」という言葉に託すことも可能なわけであり、結果的にはタイトルの選択は間違いではなかったと考えるに至った。田中優子は「毎日新聞」の書評（2006年6月25日付け）において、原題の「日本における貧困と犯罪」よりも、訳書のタイトルの方がはるかに内容を表している、と評している。

を描いている。日本の貧苦に関し、年代や数値を軸にした歴史的展望を与える叙事的記述が坦々と続くなかに、随時、文学的テキストの引用と敷衍、またポンス自身のルポルタージュ的記述が挿入されている。こうした記述の多様性、その緩急とバランスが、ひとつのジャンルに収まりきらない本書の独特の魅力となっている。スタイルこそ違え、それらの記述の根底にあるのは、歴史に埋もれてきた現象に光を当て、「声無き者たちに言葉を与え¹⁴」ようとする意志であろう。以下に、日本の貧苦の歴史に注ぐ、ポンスのルポルタージュ的記述を取り上げ考察してみたい。

暗く、幾何学的な形姿が海に浮かんでいて、まるで戦艦のシルエットであるために、「軍艦島」の異名を持つこの小さな島は、長崎沖、高島の程近くにある。第二次世界大戦中、敵国の潜水艦は攻撃を仕掛けようとしたことだろう。その小さな島は、実の名を端島といい、「煙草一本吸う間に一周できてしまう」と漁民たちは言う。この島は、1975年まで、海に浮かぶ小さな鉱山の島であった。実際、コンクリートで覆われ、十階建て程の灰色っぽく陰気な建物が建ち並ぶ端島は、効率の法則に隷属した一種のファランステールであった。終戦直後は八千人の炭鉱労働者とその家族が、一辺四百メートルにひしめき合って暮らしていた。坑道を出るとすぐに、穴居人のためのような住居が凝集していた。今や、無人島となった端島は、産業革命の朽ち果てたモニュメントと化しており、この辛苦の聖地を訪ねる者は誰もいない。日本最古の鉱山があり、イギリス人商人で冒険家のトーマス・グラバー（彼の生涯は「蝶々夫人」の台本作者にヒントを与えたとしても不思議ではない）が、1969年から鉱脈を探していた高島の隣の島の墓地は、ようやく1987年に閉鎖されたが、朝鮮名の刻まれた百ばかりの墓碑が、海底の坑道でつらい仕事をしていたのは、日本人ばかりでなかったことを偲ばせる¹⁵。

第一部第5章の「炭鉱労働者・港湾労働者・肉体労働者」と題された一節の冒頭に置かれたこの記述には、近代日本における非人間的な労働集約性の極限的

¹⁴ 《Donner la parole aux gens qui ne l'ont pas》前掲記事《Le monde intérieur de Philippe Pons》参照。

¹⁵ 前掲書『裏社会の日本史』114－115頁。ただし、若干字句を手直した。原文は以下の通り。本書のフランス語引用についてはMCの略号を用いる。

《Avec ses formes géométriques sombres se détachant sur la mer, on dirait la silhouette d'un navire de guerre, aussi a-t-on surnommé *gunkanjima* (l'île-cuirassé) cette petite île

表現である軍艦島に注ぐ、客観の力と共苦の感情の拮抗するポンスの眼差しの
が感得される。2003年頃から「軍艦島」に関する出版物（写真集を含む）が相
次いで出版され¹⁶、現在、軍艦島は一種の観光地と化しているが、少なくとも1999
年の執筆時点で軍艦島へ着目し得たということは、ポンスがいかに忘却の淵に
あるものに対して鋭敏な感受性を持しているかの証である。19世紀フランスの
空想社会主義者シャルル・フーリエ Charles Fourier の構想した友愛的ユート
ピア「ファランステール」Phalanstère を、この資本主義の逆ユートピアの隠喩
としたところに、ポンスの慧眼が看取されよう。廃墟となった軍艦島は、人間
の夢と欲望、またその空しさ、そして、生きるということの底知れぬ業につい
ての思考を誘ってやまない。ここにおいてポンスの記述は、日本論という枠組
みを超え、人間の実存の表現に向かっていると言ってよいだろう。

ポンスは、現場に飛び込み、実によく人の話に耳を傾ける。日本社会の周縁
に置かれた人は、外国人であるポンスにかえって近しさを感じて胸底深く埋め
られた思いを吐露するのだろうか。本書には、そう思われる記述が散見され
る。以下に、そうした記述の一つを掲げよう。

「山谷や釜ヶ崎は、名前のかわりに、手ぬぐい一枚で生きてゆける唯一の
場所だよ。」と林光一は言う。「この人間には、皆、物語がある。凡庸な話
だ。女や賭博で問題を起こしたり、倒産したりといったことだね。弱さや不
運によるものだ。心の傷は大したことないんだが、決して癒えないんだ。傷

non loin de Takashima, au large de Nagasaki. Pendant la Seconde Guerre mondiale, d'ailleurs, des sous-marins ennemis auraient cherché à la torpiller. De son vrai nom, Hajima, cette île minuscule, dont «on peut faire le tour le temps de fumer une cigarette», disent les pêcheurs de la région, fut, jusqu'en 1975, une cité minière miniature perdue en mer. Pratiquement recouverte d'une robe de béton, hérissée de lugubres logements grisâtres d'une dizaine d'étages, Hajima fut une sorte de phalanstère asservi à la loi de la rentabilité: au lendemain de la guerre, huit mille mineurs, et leurs familles s'entassaient sur cet îlot de quatre cents mètres de côté, sortant des galeries pour s'agglutiner dans des logements de troglodytes serrés les uns contre les autres. Aujourd'hui désertée, Hajima est un monument délabré de la révolution industrielle que personne ne visite, un haut lieu de labeur et de souffrance. Dans le cimetière de l'île voisine de Takashima, où se trouvait l'une des plus anciennes mines du Japon, dont le filon, exploité dès 1869 par le marchand et aventurier anglais Thomas Glover (sa vie aurait inspiré l'auteur du livret de *Madame Butterfly*) ne fut fermé qu'en 1987, une centaine de stèles portant des noms coréens rappellent que les Japonais n'étaient pas les seuls à avoir trimé dans les galeries s'enfonçant sous la mer.》(MC, p.175)

¹⁶ Cf. 雑賀雄二『軍艦島—眠りのなかの覚醒』淡交社、2003年、小林伸一郎『No man's land 軍艦島』講談社、2004年。

を負って、ひとりぼっちで、寒々しいどんづまりにやってきて、もう、策を練ってうまくやっていこうなどとは思えなくなる。ここでの生活の唯一の掟は、目にすること、耳にすること、全てに無関心でいることだ。他人の人生に踏み込んだりしないこと。それだけが、残された人生を保っていく術なんだ。ここで皆が共有しているのは、緩慢な死だ。死はいつもそこにある。死はほんとに身近で、朝早く、道路に、新聞紙をかぶってぐったりとなっている体が横たわっていて、それが 前の晩、一緒に飲んでいた奴だったりする。唯一、確かなのは、こんなどんづまりにまで来てしまったのだから、皆、同類だということだ。列車に乗って再出発するということはありません、「ヤマ」（山谷の住人の間での隠語で、山谷を意味する言葉）で死ぬんだ。」「死ぬために来ているとも知らず、皆、生き延びるためにここにやってくるのだ」と、ある日、釜が崎の銭湯で出会った孔子のような髭をたくわえた老人が、林さんの言葉に返すかのように言った¹⁷。

出自や履歴のマイナスを、関係の遠さゆえに外国人に吐露しやすいという面があるにしても、このような言葉は、取材と称していきなりマイクを向けて得られるものではないだろう。こうした言葉を引き出し得たのは、ドヤ街の住人と行動を共にするポンスの開かれた姿勢あってこそではなかろうか。単なる好奇心や憐れみの対象と見ていると感じられれば、ドヤ街の人々もここまで胸襟を開いて己を語ることはないだろう。ポンスは、ドヤ街の人々との交際につい

¹⁷ 『裏社会の日本史』146頁。《Sanya ou Kamagasaki sont les seuls endroits où l'on peut vivre avec un simple *tenugui* en guise de nom》，expliquait Hayashi Koichi. 《Tout le monde ici a une histoire. Banale: Affaire de femme, de jeu de mauvais coup. Une histoire faite de faiblesse et de malchance. Une blessure au coeur dérisoire mais qui ne s'est jamais cicatrisée. Elle vous a conduit à ce bout du chemin, cet chemin, cet espace de solitude glaciale, où l'on ne peut plus ruser avec soi-même. Une seule règle de vie ici: être indifférent à tout ce que l'on voit, à ce que l'on entend. Ne pas faire intrusion dans la vie des autres, c'est la seule manière de préserver ce qui reste de sa propre vie. Ce que l'on a en partage ici, c'est la mort lente. Elle est là tout le temps, si proche qu'on la côtoie parfois au petit matin sur un trottoir sous la forme du corps inerte recouvert par des journaux de celui avec qui, la veille peut-être, on était en train de boire. On rafle son existence à la volée, sans vraiment la vouloir— par lâcheté. La seule certitude, c'est qu'on est tous égaux car on est arrivé en bout de course. Le train ne repartira pas et l'on mourra sur la 《Montagne》(Yama: le nom de Sanya dans le jargon de ses habitants). 《On croit qu'on vient ici pour survivre sans savoir que c'est pour y mourir》，renchérissait, en écho aux propos de Hayashi-san, un vieil homme à barbe confucéenne rencontré un jour dans le bain public de Kamagasaki.》(MC, pp.223-224)

て多くを語ってはいないが¹⁸、彼らの親しみと信頼感を得てこそ、このような言葉を聞き取ることができたのである。

ドヤ街での体験を通してポンスは、ドヤ街の住人がその日を生きる¹⁹ことに精一杯で、現状の打開などといった未来への希望を抱けず、連帯感も生じない現実を見据えている。以下にドヤ街についてのポンスの省察の言葉を掲げよう。

ドヤ街での生活は、共同体の感覚を与えることなく、身分を乱暴に平等化する。相互扶助の振る舞いがあるとしても、個人のイニシアティブの領域が残っている。集団の連帯感というものは殆ど存在しない。確かに、怒りの爆発ということはあるが、組織だった運動の形より、不平の訴え、復讐や反抗の激発、あるいはお定まりの抗議の儀式的形を取る。こうした暴力の激発は、集団意識の反映というより、皆が共有している宿命の感覚の反映である。ドヤ街の住人の大半はノンポリである。この人々はそれぞれ、望みは断たれていると知っている。権利回復のための慈善団体も左翼の闘士も、この下層プロレタリアートを希望の共同体や改革の名白とすることに成功したためしがない。ドヤ街の住人たちは、まるで自らの心の奥深くに絶対的な反抗の精神を秘め、あまりにも激しい遺恨があるためにかえって落ち着き払ってしまったかのように、こうした試みに対しては、頑として動こうとしない。傷は内面的なものであって、貧窮は端に物質的なものではないので、後戻りはきかないのである。貧困は生きようとする意欲を削ぐ。そのことを誰もが知っている²⁰。

¹⁸ ポンスは、注記に山谷のドヤ街の導きをしてくれた林光一さんと、大阪の飛田地区を教えてくれたタテベさんに、謝辞を載せている。

¹⁹ ポンスは、別の場所でドヤ街の住人の追い詰められた生について「死なないでいる」という表現を用いている。

²⁰ 『裏社会の日本史』155頁。《La vie dans une *doya-gai* égalise sauvagement les statuts sans donner naissance à un sentiment de communauté. Si des gestes d'entraide existent, ils restent du domaine de l'initiative individuelle: la solidarité de groupe est quasi absente. Il peut certes y avoir des explosions de colère, mais elle tiennent plus de la vindicte, de la flambée de révolte, voire du rituel de protestation, que du mouvement organisé. Ces sursauts de violence reflète plus un sentiment de destin partagé qu'une prise de conscience collective. La plupart des habitants des *doya-gai* sont politiquement désengagés. Chacun ici sait que son horizon est barré. Pas plus les associations charitables, dans leur souci de réhabilitation, que les militants d'extrême gauche n'ont jamais réussi à faire de ce sous-prolétariat une communauté d'espoir ou un ferment de la révolution. Les habitants des *doya-gai* sont rétifs à de telles entreprises comme s'ils portaient au fond d'eux-mêmes une rébellion plus absolue, une rancœur si définitive qu'elle en devient presque sereine.

以上の記述を社会学的分析と呼ぶことも可能だが、要は、ポンスの理解への真摯な欲求が導いた、人間の実存のぎりぎりの姿の認識の言葉である。この認識の言葉は決してただ客観的で冷静なだけのものではない。悲惨なものから目を逸らさず、見つめ続けること、「悲惨」を「悲惨」のままに捉えることでシモース・ヴェイユは真理を求めようとした。ポンスの記述において強い印象として残るのは、現状の打開策を語ったり、ドヤ街の住人に対する思いを述べたりするのではなく、ひたすら現状をつぶさに見つめることの中にある、そのような位相である。

人間の悲惨を見つめるポンスの認識者としての原質が伺われるのは、以下に引用する上野駅でのホームレスとのさりげない出会いのエピソードである。

午前零時、東北地方や郊外への電車が出る東京・上野駅。カップ酒の自動販売機の前で、よれよれのズボンをはき、べとついた灰色の髪で顔を隠した男が、丹念にチェックの上着のポケットの奥を探っている。その上着はおそらく見映えのした頃もあったのだろうが、今やただのぼろ着である。ポケットを裏返し、その男は何分もじっと見ていた。その場を後にするかのようになり、自動販売機に立てかけておいたこうもり傘を一、二度、手に取った。それから思い直してまた傘を置き、再び執拗にポケットを探り始めた。男にやった硬貨はポケットの中だ。年齢不詳の、だがひどく老け、頬のこけた顔が、垢でごわごわになった髪の間からのぞいている。男は視線を逸らし、微かに笑った。「どうも、どうも」。硬貨はどうかこうにか自動販売機に入った。カップ酒が落ちてきた。男はそれを取ると傘を掴み、こちらの方を向いて、恭しくお辞儀をして立ち去った。人目を憚るような猫背気味の、まるでチャップリンのような姿が人波にかき消えていった²¹。

La brûlure est intérieure et la pauvreté, parce qu'elle n'est pas seulement matérielle, est sans retour. Elle a entamé l'appétit de vivre. Et chacun le sait.》. (MC, pp.235-236)

²¹ 『裏社会の日本史』(156－157頁)《Minuit, gare de Ueno à Tokyo, d'où partent les trains pour le nord et les banlieues. Devant le distributeur à canettes de saké, son pantalon tire-bouchonnant sur ses chaussures et ses cheveux gris poisseux cachant son visage, il fouillait avec application au fond des poches d'une veste à carreaux qui avait dû avoir son heure de splendeur mais n'était plus qu'une loque. La poche retournée; il la regardait, la lisait pendant de longues minutes. Une ou deux fois, comme s'il allait partir, il avait repris son parapluie aux baleines en épi posé contre le distributeur. Puis, se ravissant, il le repopsait et reprenait son manège compulsif. La pièce que nous lui donnâmes suspendit la fouille. Un visage creusé, sans âge et pourtant si vieux, apparut entre les cheveux raidés de crasse. Regard voilé. Esquisse de sourire: 《dōmo, dōmo (merci)》. La pièce fut

ポンスはホームレスに無関心ではいられない。いくらかの小銭を恵むが、恵むことがホームレスに羞恥を与えないではないことも承知している。無関心でいられないポンスのやさしさと、恵まれることに感謝しつつ、羞恥も覚えるホームレスの複雑な心の裡とが交錯する場面である。この一幕は、ホームレスが喜劇王チャプリンの哀愁の姿に重ね合わされ、群衆の混沌へと融解することにより閉じられている。

ボードレールの読者なら、この一幕に、散文詩集『パリの憂愁²²』の「年老いた大道芸人²³」や「群衆²⁴」といった詩篇を思い浮かべない者はいないであろう。「流れようとはしない涙に溢れた目²⁵」という言葉で、ボードレールは老大道芸人を憐憫の心で捉えることを禁じた。ユゴーのように、悲惨を生きる者に対して父性的な慈愛や博愛を注ぐのではなく、落涙を禁じ、ただ悲惨を見つめるという位相に留まること。それがボードレールの倫理的選択だったのだが、ポンスの姿勢は、ボードレールのそれに重なっていると言えるだろう²⁶。

以上の如く、ポンスの貧苦をめぐる記述をつぶさに検討してみると、ここにおいて問題になっているのは、「異文化」の記述という次元ではなく、人間の実存の認識の次元であることがわかるだろう。いわば「零れ落ちようとはしない涙」を堪えているために瞳が光って見える人、それがポンスなのである。

しかし本書には、ポンスが異文化からやって来た人間であるからこそ指摘し得たと思われる問題が幾つかある。一つは、日本において、仏教界が貧困の問題に対して冷淡であり、もっぱらキリスト教系の団体が貧困の問題に熱心に取り

laborieusement introduite dans la fente. La canette de saké tomba. Il la ramassa, prit son parapluie, s'inclina cérémonieusement dans notre direction puis repartit: silhouette voûtée et furtive, chaplinesque, perdue dans la foule.》(MC, p.237-238)

²² Baudelaire, 《Spleen de Paris》, *Oeuvres complètes I*, Paris, Gallimard, 1975, pp273-374.

²³ *Ibid.*, pp 295-297.

²⁴ *Ibid.*, pp 291-292.

²⁵ 《mes regards étaient offusqués par ces larmes rebelles qui ne veulent pas tomber》, *Ibid.*, pp.296

²⁶ ポンスはヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』*Les Misérables*の「人間の歴史は污水溜めに反映される」《L'histoire des hommes se reflète dans l'histoire des cloaques》という言葉を書のエピグラフに掲げている。貧困や犯罪、人間の暗黒面を文学の主要テーマとしたユゴーに共感を示していると言ってよいだろう。しかし、ポンスの貧者に対する姿勢は、明らかにユゴー的というよりボードレール的である。貧者への「施し」というテーマは、否応無く倫理を問う。パリ第8大学とコーネル大学で教鞭を執るアンヌ＝エマニュエル・ベルジェAnne-Emmanuelle Bergerは、『施しの場面』*Scène d'aumône*と題した研究書(Paris, Honoré Champion, 2004)において、フランス近代詩における貧困のテーマについて論じている。

り組んできたという事実である²⁷。仏教界や神道が貧困の問題に冷淡である事実は、親鸞が差別され虐げられた貧者たちとともにあろうとした事実が本書に述べられている²⁸だけに、痛烈な指摘となっている。ポンスが記したキリスト教系団体²⁹の貧困問題への取り組みも、日本において広く知られている事実であるとは言いがたい。日本において、概して貧困の問題が可視化されないよう周到に仕組まれてきた事実も、国内の論者によってはあまり指摘されなかったことである³⁰。東京オリンピック開催に合わせ、外国人に見られても恥ずかしくないように、ホームレス一掃が為されたとポンスは坦々と記しているが³¹、その事実の指摘自体が、戦後の繁栄の陰の部分への我々日本人の想像力の欠如への手厳しい批判にもなっている。

5. ポンスの目に映るやくざたち

本書の第二部においては、自ら一般社会の規範を拒否・逸脱したことにより、負の地位をプラスに転化させる傾向も含み持つ、能動的周縁性の現象について述べられている。すなわち、堅気の社会の規範から逸脱し、逸脱することにより力を得る類いの現象が取り上げられている。記述の対象となっているのは、江戸時代の博徒や義侠、明治期の民権侠客、大陸ゴロ、戦後の闇市を牛耳ったテキヤ、保守政治家との絆を深めた戦後の復興期から高度経済成長期にかけてのやくざ、暴力団対策法以後のビジネスやくざ、そして、物語や映画の中のやくざ像といったテーマである。ポンスは、こうした社会的逸脱現象を指弾するのではなく、逸脱現象と堅気の社会の関係性や相互浸透性に意を払いつつ、日本における能動的周縁性の社会的機能を見定めようとしている。

ポンスは日本の歴史の個々の事象をつなぐ論理を見出す必要からであろうが、第二部の執筆にあたって、日本の歴史の外側にいくつか参照軸を求めている。その一つが、英国の政治学者エリック・ホブズボームの「社会的盗賊行為」と

²⁷ MC, p.242.

²⁸ MC, p.54.

²⁹ 「蟻の街」やエマウス運動のことが取り上げられている。(MC, p.204)

³⁰ 日本のマスメディアにおいて、貧困の問題が可視化されるようになったのは、出口の見えない不況による打撃が隠しおおせなくなり、「ワーキングプア」という言葉が浸透し、日比谷公園に派遣村が設営された2007年頃からである。高度経済成長期以降、多くの日本人が「繁栄と飽食の日本」というイメージに目隠しされ、常に存在していた貧困者たちの存在を直視しようとしなかった。社会の繁栄の陰で、ますます内向してしまった貧困者の側の羞恥心も、貧困を可視化する回路が作られない理由の一端であったと考えられる。

³¹ MC, p.239.

いうコンセプト³²である。ホブズボームによれば、「社会的盗賊行為」は農業に依拠するあらゆる社会に共通の現象である。生産力の発展と、実際の社会制度の発展との間にはタイムラグがあり、その差を埋めるために生じるのが、「社会的盗賊行為」であるという。「社会的盗賊行為」とは、社会的正義を実現するという理想の下に行われる収奪行為のことである。ポンスはこのコンセプトに詳細な検討を加えた上、マフィアやンドランゲタ、ロビンフッドなどと対照させつつ、江戸期以降の日本の「能動的周縁性」のそれぞれの時代における諸形態について「社会的盗賊行為」のコンセプトに合致するか否かを問うている。すなわち、各時代の「能動的周縁性」に正義の理想を実現する契機が含まれているかどうかを見極めようとしているのである。

ポンスの主張によれば、日本においては江戸期や自由民権運動の限られた時代に「社会的盗賊行為」としての能動的周縁性が存在し、反権力的傾向を帯びていたが、その他の時代において能動的周縁の人々が反権力的であったわけではなく、権力側に身を寄せることによって、堅気の人々に対し、ゆすりやおどしやたかりを行った、ということになる³³。単なる社会的逸脱なのか、社会的な理想を含んだものか見極めるのは容易なことではないと考えられるが、ポンスは丹念に史実を積み重ねることによって、判断を試みている。

結局、日本の歴史において、やくざ的なものの中の「社会的理想」なるものは、大きな位置を占めるものではない、と最終的にポンスは判断しているわけだが、上記のような社会的逸脱現象が歴史上存続しつづけてきた（しつづけている）ことには、それなりの意味があるとポンスは推論している。「能動的周縁性」は、合法的な社会の基準では処理しえないような、複雑で矛盾に満ちた現象に対処する機能を果たしている、というのがポンスの見立てである。正常と逸脱、堅気とやくざ—そうした区別は所詮人間の下す一種の価値判断、すなわち相対的なものであり、両者を明確に截断するものが存在するわけではない、とする認識がポンスにはある。そもそも、このような価値の相対性への気付きがなければ、社会における周縁的現象に着目することによって当該社会の特質の把握を試みるという方法論に行き着くことはなかっただろう。

以下に、「やくざ」的なものを一般社会の例外的現象とみなす傾向に粘り強く反駁を試みるポンスの思考を辿ってみよう。ポンスは、マフィアの例に合わせ言及しつつ論じている。

³² Eric Hobsbawm, *Primitive Rebels*, New York, W.W.Norton, 1959.

³³ MC, p529.

マフィアややくざの文化は古風なものなのであろうか。言葉を変えるなら、しばしば指摘されるように、近代社会における「封建主義」のアナクロニズムの単なる遺物と見るべきなのだろうか。社会の不動性を主張する都合のよい解説には警戒しなければならない。まず、すでに見てきた通り、やくざやマフィアの文化は、彼らが極端なものにしている価値観と結びついているが、こうした価値観はやくざやマフィアを取り巻く社会にも広まっているものである。さらに言うなら、やくざやマフィアの文化を母体とする組織的システムは、自分たちのものでもある周りの社会環境において見出されないならば、「水の中の魚」のように存続していくことはできないであろう。やくざやマフィアの基層文化は、それを取り巻く社会や文化の形態に似通ったものであり、またその極端な形となっているように思われる。伝統が存続するためには文化的養土が必要である。慣習は理由なく絶えたり存続したりすることはない。ある慣習が存続しているのは、慣習が機能し続けているからなのである³⁴。

マフィアややくざを抹殺されるべき社会悪と見るのではなく、存続しているからには社会の中で何かの機能を担っていると考えること。それがポンスの方法である。何であれ、抹殺するべき社会悪であると断定するより、悪と見なされているものの存在理由を考える方がはるかに知的な努力を要するのは明らかであろう。

日本におけるやくざの存在について考えていくと、その背後には、差別や抑圧、貧困の問題が見えてくる。ポンスが掲げた二つのカテゴリーである「受動

³⁴ 『裏社会の日本史』280頁。《Les sous-cultures de la Mafia ou des *yakuza* sont-elles archaïsantes? En d'autres termes, doivent-elle être perçues comme de simples survivances anachroniques du «féodalisme» dans la société moderne, comme on l'a parfois écrit? Il faut se méfier de ces explications commodes insistant sur les immobilismes sociaux. Tout d'abord, ces sous-cultures criminelles se rattachent, nous l'avons vu, à un système de valeurs qu'elles exacerbent mais qui n'en est pas moins diffus dans l'univers social environnant. Allant plus loin, on peut penser que les systèmes organisationnels dont ces sous-cultures sont la matrice ne pourraient subsister s'ils ne se trouvaient pas, dans l'environnement social qui est le leur, comme «un poisson dans l'eau». Elles participent plutôt, nous semble-t-il, de configurations socioculturelles dont elles constituent des pôles extrêmes. Pour qu'une tradition se maintienne, il faut que demeure l'humus culturel dans lequel elle est née. Les coutumes ne disparaissent et ne survivent pas sans raison: quand elles subsistent, c'est dans la permanence d'une fonction qu'il faut en chercher la cause.》(MC, p.424)

的周縁性」と「能動的周縁性」は、完全に独立した事象だというわけではないのである。浩瀚なる本書の中で、両者の関係について触れられた部分は分量的には極く限られているが、この部分は、二部構成の本書の蝶番にあたる部分であると言ってよい。この二つの周縁性の関連について言挙げすることは、日本社会においては暗黙のタブーとなっているように思われる。ポンスは日本人と結婚し、日本での生活も長く、こうしたタブーに気付いていないはずはない。ポンスは事情を承知の上で、冷静なる観察者として、この二種の周縁性の関連の記述に踏み込んだのである。以下に当該箇所の記述を掲げよう³⁵。

警察庁の統計によれば、やくざの六〇パーセントが中流家庭に、四〇パーセントが恵まれない層に属する。しかし、八〇パーセントは義務教育を超える教育を受けていない。多くは、失踪の癖があり、また不和を抱えた家庭の出身である。彼らとやくざとの最初の接点は、バーやディスコ、娯楽センターでの仕事探しの際である。多くが、軽微な窃盗から始まり、少年院に送られている。六〇年代の高度成長期以降、やくざの多くは青年期に暴走族（字義通り取れば、「スピード狂」のことである）の一員であった。

こうした逆境の若者、途方にくれた若者であったちんぴら（若いやくざ）に対し、暴力団は、よりどころとやくざ的な陰なる文化の指標と、極端に単純化された関係（忠誠、体力、暴力）から成り立つ世界、選択が限られてくるゆえに結局は安心感をもたらしてくれる世界とを授けるのである。少年院、家族の厄介者としての気ままと無為（・・・略）そして、一線が超えられる。これが、やくざの人生のライトモチーフである。

日本においては、やくざが彷徨の案内人であった。やくざは封建社会のいかなるカテゴリーにも属さない人々や、どこにも登録されていない人（無宿人）のための環境システムであった。後にやくざのメンバーに被差別のマイ

³⁵ 二つの周縁性を結ぶものについて書かれたこの記述は、ことに訳出することが躊躇われた部分である。ポンスの記述の妥当性について訳者自身が納得することができても、被差別部落問題にもかなり踏み込んだ記述のなされている本書が、日本社会の現実の中でどう受け止められるかについては、不安なしではなかった。人権的な観点から問題となる表現がないかということが、一番の懸念であった。訳者の懸念を共有された担当編集者は、校正段階において、部落解放同盟幹部の方に訳稿のうち差別の歴史と現状に関連する部分の閲読を依頼し意見を聴取された。ご多忙の中、時間を割いて細かくチェックして下さったのだが、ポンスの記述自体に削除すべき部分は殆どない、とのご意見であった。歴史的事実を隠蔽すること自体が差別意識の残存に繋がってきたとの認識による判断であることが理解された。こうした経緯を踏まえ、原著の半頁ほどを除き、全てを忠実に訳出する方針を取ることにした。

ノリティー（被差別民と在日韓国・朝鮮人）出身者が見られるようになる。近代の日本においては、やくざの世界に入っていく経緯は様々であった。ちんぴら、倒産した場外馬券売り場の元主人、元警官、ニセ弁護士や汚職の官僚まで、やくざの社会的スペクトルの幅は広い。しかし、依然として差別は、やくざの出発点の重要な要素である。広く日本のやくざ界は、貧民街の出身者からなっている。貧民街は、すべてがというわけではないが、往々にして被差別民の住んでいる界限である。また、やくざのメンバーの中には、社会的偏見の犠牲者であるもう一つのマイノリティ、在日韓国・朝鮮人が少なからず含まれている。被差別民にしても在日韓国・朝鮮人にしても、つねにまわりついてきた差別が解消してしまう世界を犯罪に見出しているのである。やくざの世界は、権力と暴力の支配する世界であるが、それは、様々な差異を無効にするものであって、出自や過去は気にならなくなるのである³⁶。

³⁶ 『裏社会の日本史』251頁。《Selon les statistiques de la police, 60% des *yakuza* appartiennent à des familles de classe moyenne et 40% aux catégories défavorisées; mais 80% n'ont pas dépassé la scolarité obligatoire. Une bonne partie était des fugueurs et beaucoup proviennent de familles désunies. Leurs premiers contacts avec la voyouterie ont été établis alors qu'ils étaient en quête de travail, dans un bar, une discothèque ou une centre d'amusement. La plupart ont commencé par des petits larcins puis se sont retrouvés en maison de correction. Depuis la période de Haute Croissance des années soixante, beaucoup de voyous ont participé, dans leur adolescence, à des bandes de motards (*bōsōzoku*: littéralement, les «fous de la vitesse»)。

A ces *chimpira* (jeunes voyous), enfants du ruisseau ou enfants paumés, la pègre offre un ancrage, les repères de sa sous-culture, un monde aux rapports simplifiés à l'extrême (fidélité, force physique, violence), un univers finalement sécurisant parce que les choix y sont réduits. La maison de redressement, la disponibilité, le désœuvrement, de néfastes exemples dans la famille (...) et le pas est franchi: leitmotif du parcours du voyou à travers le monde.

Dans le cas japonais, la pègre a canalisé l'errance; elle a été un système d'encadrement déviant pour ceux qui n'appartenaient à aucune catégorie de la société féodale ou n'étaient enregistrés nulle part (*mushukunin*). Par la suite, beaucoup de membres de la pègre vinrent des minorités discriminées (*burakumin* et Coréens).

Le recrutement de la pègre est devenu, dans le Japon moderne, un phénomène complexe. Du petit voyou à l'ex-patron d'une P.M.E. qui a fait faillite en passant par d'anciens policiers, des avocats marrons ou des fonctionnaires corrompus, le spectre social de pègre est large. Mais la discrimination reste un élément important de l'origine des truands. Dans une large mesure, le Milieu japonais est composé d'individus originaires des ghettos de la pauvreté et, par conséquent, souvent, mais pas toujours, des quartiers habités par les catégories sociales discriminées. Beaucoup de truand proviennent aussi d'une autre minorité victime de préjugés sociaux, les Coréens résidant au Japon. Tant les uns que les autres trouvent dans la criminalité un monde où se dissout une discrimination toujours rampante. Le Milieu est un univers où règnent la force et la violence, mais qui abolit les

オリエンタルホテル創業者の家系に生まれ、何不自由なく育ちながら、やくざの道に足を踏み入れ『壁の中の懲りない面々』などの著作を発表している安部譲二の例にも触れ、貧困や差別だけが極道の道に入るきっかけではないことを示しつつ³⁷、やくざや極道の道の選択の無視し得ない背景の一つに、貧困や差別の問題があることを、ポンスは以上の如く記している。この記述は、受け止めようによっては、差別的なステレオタイプに繋がり兼ねない危険性を伴うものであるが、「受動的周縁性」（貧困や被差別の境遇）から「能動的周縁性」への転換という痛切なる理路を理解すること自体は決して差別的なことではない。我々の社会の中には、「差別的である」として言挙げを避け、タブーに触れないことを良しとして思考停止してしまうことで、かえって差別を残存させてしまっているという側面があるのではないだろうか。例えば昨今見られる「差別用語」狩りにも、同断の問題が潜んでいると感じられてならない。タブー意識を増長させ、ポリティカル・コレクトネスの名目のもと、当たり障りなく糖衣に包んだような言葉しか許されず思考停止している社会より、耳障りで乱暴な言葉が飛び交っていたとしても、まず事象の理解への努力がなされ、問題が問題として可視化されている社会のほうが健全だと言えるのではないか。タブー意識からかなり自由な、二つの周縁性をめぐる上記のポンスの記述からは、そのようなことを考えさせられる。

ポンスは、このように二つの周縁性の関係性について概略を示すとともに、やくざの道、極道を選択肢とした幾人かの人物の人生を丹念に辿ってみせている³⁸。それは、単に個別的な好奇心というよりも、そうした選択をした人物の人生に、社会や時代の実相が生々しく反映されているとの認識あってこそその記述である。ポンスは、やくざの親分のポートレートを描くために、実際、面会・インタビューを果たしている³⁹。やくざの親分とは、社会や時代の結節点とも言える存在だとポンスは見なしていたのではなかろうか。親分のもとへと参じるポンスの原動力は何かと考えると、そのように思われてくる。

ポンスは、歴史上のやくざ・極道について追求するのみならず、民衆的想像力の中にあるやくざ像についてもかなりの頁を割いている。ポンスは、やくざや極道が、日本の民衆に放っている魅力を知悉している。現実のやくざの動向

différences, l'on ne s'inquiète pas d'une origine ou d'un passé.》(MC, pp.378-379)

³⁷ MC., pp.378, 410,413

³⁸ MC, pp.378-360

³⁹ MC, p.377

について、『アサヒ芸能』だの『週刊実話』などといった雑誌がキャッチアップしているが、それらは単なるニュースやゴシップに留まるものではなく、物語化の契機、英雄譚への志向を孕んでおり、読者がそこに一種のカタルシスを求めていることを、ポンスは見逃さない。また江戸期以降の様々な物語の中において侠客や浪人が、いかに魅力的な登場人物として描かれてきたかもポンスは詳述する。ポンスはかなりの「任侠映画」を観ており、それらがいかなる心理や時代の表現になっているかについても、鋭い筆鋒をふるっている。任侠映画は専ら娯楽映画として受け入れられ、その心理的意義や、社会的・時代的意義を論じられることが少ないだけに、それは興味深い批評となっている。いささか長い引用になるが、そのような件の中から二つの断片を紹介しよう。ポンスの批評眼の特質が際立つ部分である。最初の断章がやくざという存在の心理的解析のなされている断章であり、それに続くのが、時代的解析のなされている断章である。

自己卑下を埋め合わせるかのようなナルシスティックな衝動に突き動かされ、やくざは何事もとことんまでつきつめないではいられない。やくざはこれみよがしの振る舞いによって自らの尊厳を保ち、儀式を崇拝し、富をひけらかすことで自らの権力と影響力を行使するのである。死へと至る宿命を引き受けるときまで、人生の劇場化は続く。生きれば帰れぬ決闘へと向うヒーローの孤独な道行のシーンは、ヤクザ映画の見せ場のひとつであり、それは、歌舞伎の道行き（たとえば、心中へと向う恋人たちなど）のシーンに若干似ている。刺青をあらわに、刀を手にして敵の暗殺へと突進するやくざの死への道行きのシーンでは、まとわりつき嘆くようなメロディーが特徴的な演歌のメランコリックで大仰な感傷的なフレーズがしばしば流れる。このような封印された宿命は、悲劇的であると同時に、どこか人を安心させるものを持っている。選択は実に決然となされるので、ヤクザ映画の単純さは、すでに敷かれた道を辿るほかなりえない、としているかのようなのである。ともあれ、宿命は逃れられない。「やくざの末路は哀れ」なのである⁴⁰。

⁴⁰ 『裏社会の日本史』271-272頁。《Animé par des pulsions narcissiques de compensation, il se doit d'être extrême en tout. C'est par l'ostentation qu'il bâtit sa respectabilité, le cultes des rituels, l'étalage de la richesse consacrent son pouvoir et son influence. Une théâtralisation de la vie se poursuivra jusqu'au moment où il devra assumer son destin en allant vers la mort: la grande scène de la marche solitaire du héros vers un combat dont il ne reviendra pas est l'un des morceaux de bravoure des films de *yakuza*, un peu comme le

60年代のやくざ映画（任侠映画）のほとんどは、やくざを社会の発展の犠牲者とする傾向があった。日本の歴史的文脈をたどると、明治から今日まで、わずかの例外を除き、相も変わらず同じ図式が繰り返されてきた。主人公は社会の秩序を乱したくはないのだが、不正を糾すため、あるいは自ら立てた誓いを守るために戦わざるを得ない。実際、やくざは抽象的、普遍的な正義のために戦うことは決してなく、誰かに対する義務を果たすために戦うのである。復讐の容赦なさをも受けて立つ名誉により、暴力は正当化される。佐藤忠男によれば、こうしたタイプの孤独なヒーローは、田舎から都会へと乗り出してきた高度経済成長期の若い独身者たちの不安を反映しているという。大都会の中で、根を持たず孤立した彼らは疎外感に苛まれ、人生の意味を捜し求める。やくざは彼らと同じく社会の発展によって周縁に追いやられた個人であり、巨大都市の匿名的空間に投げ込まれ、敵意に満ちた不確かな世界の中に暮らし、絶えず自らの居場所を得ようとしていたのであった。

学生運動の大きな広がりによって特色づけられる六十年代という時代の文脈の中で、やくざ映画は、利潤のみに向かう社会に反抗する者たちによってなされた「反撃」に近い、抵抗の表現としての暴力というメッセージをも広めた。孤独なやくざの物語は、不正な世界に対する個人的反抗の一種の寓話だったのである。（・・・）やくざの反抗的人物は、ほとんどバクーニンの次元にいたるほどで、そのことを象徴的に示すことであるが、六十年代末の叛乱学生たちは、高倉健を自分たちの「実存的ヒーロー」と仰いだ。近代資本主義の日本の拒否という点で、極左と極右が一致を見せた。三島由紀夫などの作家もやくざ映画の崇拝者であった。三島は、戦後の文化的混乱や、「日本性」の「喪失」と見なされるものを告発し、やくざのライトモチーフたる名誉の規範や忍耐力や「徹底主義」の中に、日本再生の力を見出していたのであった⁴¹。

michiyuki des pièces de *kabuki* (par exemple, le voyage des amants qui vont commettre un double suicide). La marche vers la mort du *yakuza* découvrant son tatouage et se lançant à l'assaut des ennemis le sabre à la main est souvent accompagnée au cinéma d'une chanson d'un sentimentalisme mélancolique et emphatique dans le genre *enka*, caractérisé par une mélodie lancinante et plaintive. Ce destin scellé est à la fois tragique et rassurant: les choix sont si clairement définis que cette simplification suggère qu'il n'y a rien d'autre dans la vie que d'assumer la voie tracée. Un destin en tout cas inexorable: «la vie du *yakuza* s'achève dans la tristesse» (*yakuzan no matsuro wa aware*).» (MC, p.412)

⁴¹ 『裏社会の日本史』273 - 274 頁。《La plupart des films de *yakuza* des années soixante (*nin-kyo eiga* : film chevaleresque) ont tendu à faire du truand une victime des évolutions

以上の記述を読めば、ポンスがやくざの生き方にある種の共感（少なくとも深い理解）を示していることが伺われるだろう。訳書刊行にあたって、編集者は「フランスの知識人の描く日本の貧困と犯罪の歴史」というキャプションを与えた。確かにポンスは「ル・モンド」というクオリティー・ペーパーの特派員を務め、把握力と分析力に富んだ記事の書ける「フランスの知識人」である。しかし、フランス本国に居を定め安定した地位を築いている知識人とポンスには、決定的な違いがある。それは、ポンスは、時代の混沌の中、確固たる価値観を築き得ず、切羽詰った思いから異郷に活路を求めた人間だという事実である。「ル・モンド」極東特派員という社会的地位を手にはしているとはいえ、異郷に生きる選択をしたという事実は重い。ポンスは、所を得ず人生のある時期にやくざ一極道という堅気の社会とは別種の論理に則った環境への参入という能動的な選択をした「能動的周縁性」の人々に、ポンスは自らに似た部分、自らに近いものを看取しているのではないだろうか。「フランスの知識人」という惹句から浮かぶような、ハイブラウで安定的なイメージでポンスを捉えるのは、

sociales ; Ayant pour contexte historique le Japon de Meiji à nos jours, ils reproduisent à peu de chose près inmanquablement le même schéma: le héros ne veut pas troubler l'ordre social mais il est contraint au combat pour remédier à une injustice ou pour honorer ses engagement. En effet, le *yakuza* ne se bat jamais pour une justice abstraite, universelle mais pour assumer une obligation envers quelqu'un. La violence est justifiée au nom de l'honneur qui passe par l'inexorable de la vengeance. Selon Sato Tadao, ce type de héros solitaire reflétait les inquiétudes des jeunes célibataires fraîchement débarqués de leur compagne en ville au cours de la période de Haute Croissance économique. Déracinés, isolés dans la grande ville, ils éprouvaient un sentiment d'aliénation et étaient en quête d'un sens à donner à leur vie. Le *yakuza* était comme eux, un individu marginalisé par les évolutions sociales et projeté au milieu de l'anonymat des mégapoles, vivant dans un monde incertain, hostile, où il avait constamment à reconquérir sa place.

Dans le contexte des années soixante marquées par de grandes manifestations étudiantes, les films de *yakuza* véhiculaient aussi un message de violence perçue comme l'expression d'un sursaut de révolte proche de la «contre-attaque» lancée par les contestataires contre une société orientée vers le seul profit. La saga solitaire du voyou était une parabole de la révolte individuelle contre un monde injuste. (.) La figure de rebelle du *yakuza* peut prendre une dimension quasi bakouninienne et, de manière symptomatique, les étudiants révoltés de la fin des années soixante feront de Takakura Ken leur «héros existentiel»: les extrêmes de gauche et de droite se rencontrant dans un même rejet du Japon moderne et capitaliste. Un auteur comme Mishima Yukio fut aussi un grand admirateur des films de *yakuza*: dénonçant la confusion culturelle de l'après-guerre et ce qu'il percevait comme une hémorragie de la «japonicité», l'écrivain voyait dans le code d'honneur des trouands et dans leur endurance (*gaman*), leitmotiv du monde de la pègre, et dans leur «jusqu'au-boutisme», une force régénératrice du Japon.» (MC, pp.414-416)

おそらく片手落ちなのである。

ポンスは本書執筆後数年して、*Peaux de brocard* (Seuil, 2002) という題の日本の刺青についての著作を上梓している。多くの刺青の写真が収められたこの本では、刺青の人間たちの生命力と反抗心が、一種の美的フレームでとらえられている。ポンスは *Misère et crime au Japon* の中で、刺青について「堅気社会との断絶、さらには堅気社会の拒否の、消し去ることのできない、また意志的な印である。⁴²」と述べているが、刺青、そしてやくざの諸事象へのポンスの傾倒には、すべてのリセットを望むかのような切羽詰まった思いで西欧世界を後にし異郷へと活路を求めた自身の来歴が、何がしか与っているように思われる。ポンスは、やくざの世界のしきたりや慣習を文化人類学的な観点から精細に捉えることも試み、マフィアやンドランゲタやロビンフッドなど、西欧世界の社会的逸脱現象（能動的周縁性）と日本のやくざの対比も交えているが、ポンスの記述に単なる好事家的な詮索に終わらない一種の迫力が備わっているのは、彼自身の実存的な探求と「やくざ」現象とが激しく共振しているからではなかと思われる。ポンスは、支配的・中心的なものから逃れ、敢えて別の（周縁的な）価値体系の中に入っていく人間の振る舞いに、古今東西を超え、強い関心を抱いているのだと考えられる。

ポンスの一つの側面が、日本という周縁に赴いた西欧人であるということだとすれば、もう一つの側面は、無論、極東特派員として日々記事を書き続けてきたということである。本書の執筆の動機のひとつに、ル・モンド社の意向や読者の志向を踏まえつつ書くために抱えるフラストレーションがあると述べたが、本書の執筆にあたっては、特派員としての経験が遺憾なく活かされている。ことに直近の事象については、学術的な総括がなされていないだけに、年代の新しい事象の記述ほど、ジャーナリストとしての力量が発揮されることになる。1999年に上梓され、1990年代後半までを分析の対象に据えた本書においては、学術的記述の蓄積のない対象について明快で説得的な概略を示した解説が随所に見られる。例えば、「やくざ」がその独特な精神的伝統や美学を喪失して身も蓋もないビジネス優位の傾向となり、合法的社会の領域に大きく食い込んできている近年の変化をポンスは、以下のように描いている。

一九八〇年代末から九〇年代初めにかけて、暴力団の経済的寄生傾向が非

⁴² 『裏社会の日本史』263頁。(MC, p.400)

常に強まった。バブル期にやくざたちは、事業で利益を上げようとするようになった。経済は極度の発展を遂げ、莫大な資金が流通し、貸付がほとんど無利子同然になるほど公定歩合が引き下げられて投資熱が高まり、成功にはやる新世代の事業家や、社内での出世競争に追い立てられている管理職たちのモラルの低下と相俟って、暴力団の事業進出には有利な条件が揃っていた。

一九八〇年代初めには、従来からの非合法的活動（覚せい剤取引、非法の賭博、売春業）が、やくざの主たる収入源であった。それが八〇年代になると事情が変わる。「経済的犯罪」が新たにはびこり始めたのである。やくざたちは、細分化され複雑になった社会の中で、魑魅魍魎の「社会の暗部」を席卷し、また「社会の暗部」を押し広げていったのである。それは、合法性と非合法性が重なり合い、陰の仲裁がなされるグレー・ゾーンである。仲裁役だったやくざは、八〇年代に入って、直接的に、あるいは、数々の中間的仲介者を介して、経済競争に加わるようになった。このように、伝承というものを持たず、やくざの世界の古い掟に無関心な新タイプのやくざは、もはや堅気の社会と無縁な集団の中で活動することはない。前世代のやくざに比して教育を受けている新世代のやくざは、新世代の実業家と同じく時代の子であり、実に大胆で、ハイリスク・ハイリターンのセンスを持ち合わせている。やくざは企業家たちに、彼らが今まで持っていなかった何かを授けた。つまり暴力に訴えること、あるいは、事業の決着を早めるための脅しである。この時期から、私設探偵事務所には、株買占めや買戻しの試みの背後に暴力団が存在しているのかどうかを知ろうとする、窮地に陥った企業からの依頼の件数が増えていった。こうして暴力団は、一九八〇年代末の「カジノ経済」の要となり、その苦い果実としてグレー・ゾーンが合法性のぎりぎりのところまで拡張し、一連のスキャンダルによって、その広がりが知られることになった。これはおそらく、日本の財界を退廃させてやまなかった負の遺産である⁴³。

⁴³ 『裏社会の日本史』283頁。《La parasitisme économique de la pègre s'était fortement renforcé à la fin des années 1980 et au début de la décennie suivante: les voyous ont tendu au cours de la période de la «bulle spéculative» à devenir partie prenante dans les affaires. Une économie en pleine expansion, l'énorme quantité de liquidités en circulation et la fièvre spéculative provoquée par un abaissement du taux d'escompte qui revenait à une quasi-gratuité du crédit, conjuguées à l'amoralisme d'une nouvelle génération de brasseurs d'affaires pressés de réussir ou de cadres talonnés par la compétition interne et la concurrence, favorisèrent le phénomène.

Si au début des années 1980 les activités illégales traditionnelles des *yakuza* (trafic des

本節で考察してきたように、ポンスの記述には日本の「やくざ」に対する実存的関心とジャーナリスト的分析力が生きている。タブーを知りつつ、タブーに切り込み、事象の本質の把握へと向かうポンスの記述は、彼自身の長年の経験や蓄積が投入された「総力戦」の趣きを呈する実に激しいものであると言わなければならない。

6. 日本の暗部への眼差し・実存への眼差し

日本における「受動的周縁性」と「能動的周縁性」という二つの周縁性をテーマとした本書は、一体、どのような結末を見ているのだろうか。どこでこれら二つの周縁性は共通の着地点を持つことになるのだろうか。これは、無論、本書の主張の根幹に関わる問題である。

順にページを繰り記述を追っていく段階では気付きにくいだが、ポンスによる二つの周縁性についての考察は、実は常に一つの中心点問い（観点）の下に為されてきたことが、この結論部にいたって明らかになってくる。それは、人間において、支配的価値に対し Non を突きつける力、規範への順応を拒絶する力はどのようなものか、という問いである。ポンスは「受動的周縁性」を描くにあたって、差別や貧困の悲惨さ、受動的周縁に置かれた人々の犠牲を丹念に描くとともに、彼らの抱える不条理な思い、彼らの反抗の萌芽、また彼らの怒り

amphétamines, jeux clandestins et commerce du plaisir) demeuraient leurs principales sources de revenus, ce n'était plus le cas à la fin de la décennie: les «crimes économiques» étaient devenus une nouvelle, et prolifique, forme de délinquance. Dans une société plus fragmentée et plus complexe, les truands avaient investi et étendu un gibouyeux «sous-bois social»: une zone grise où légalité et illégalité se chevauchent et où s'opèrent les arbitrages de coulisse: De médiateur, le voyou devint à partir de cette époque un intervenant dans la compétition économique, soit directement, soit au fil d'une cascade d'intermédiaires. Ces nouveaux *yakuza*, sans folklore et indifférents aux vieilles règles du Milieu ne se comportaient plus en corps étranger à la société admise. Plus éduqués que leurs prédécesseurs, ils avaient en commun avec une nouvelle génération d'hommes d'affaires, également produits de l'époque, le goût du risque et du gain conjugué à une totale absence de scrupules. Les voyous leur apportaient quelque chose qu'ils n'avaient pas: le recours à la violence ou à sa menace pour accélérer la conclusion d'une affaire. A partir de cette époque, les agences de détectives privés commencèrent à recevoir un nombre croissant de demandes de la part de sociétés en difficulté voulant savoir si des gangsters n'étaient pas derrière tel *raid* boursier ou telle tentative de rachat. Le pègre devint ainsi partie prenante dans l'«économie de casino» de la fin des années 1980, dont l'un des fruits amers fut l'extension de cette zone grise à la lisière de la légalité qu'une suite de scandales allait mettre en lumière dans toute son étendue. Un héritage qui n'a peut-être pas fini de gangrener le monde de la finance japonaise.» (MC, pp.428-429)

の集団的爆発の事象についても記述を惜しまなかった。そのことを見逃してはならない。「受動的周縁性」と「能動的周縁性」との間には既に見てきたとおり、通い路がある。ポンスが「受動的周縁性」についての記述を第一部に置き、「能動的周縁性」についての記述を第二部に置いたことには、大きな意味がある。「受動的周縁性」の記述に伏在していた「反抗」のテーマは、「能動的周縁性」の記述において、より大きな位置を占めるようになる。そして、結論部においてポンスは、日本の歴史に脈々と連なる「反抗」と「拒絶」の論理を抉出してみせるのである。かくして「受動的周縁」と「能動的周縁」とが、このパノラマ上に共に位置づけられることになる。この結論部は、第一部と第二部で述べられたことの単なる総括に止まるものではなく、「反抗と拒絶の歴史」という視点の導入によって、既述の事象が新たな照明の下に浮かび上がる、実に鮮やかな展開を含んだ秀逸なものであると言わなければならない。

海外においては「礼儀正しく、従順で、集団主義的な日本人」というステレオタイプが根強いだけに、本書が力強く描き出す反抗と拒絶の系譜は、一つの日本論としてインパクトを持っている。またそれは、管理社会化が進み、個人の自由と自発性の領域がますます狭められているかに見える昨今の日本の状況へのアンチテーゼになっていると読むことができる。

雄渾とも評し得る、本書の結論部の一節を以下に掲げよう。

日本の歴史には、個人的・集団的を問わず反乱や暴動が見られた。日本列島は不服従の者たちの住処でもある。高天原を追われた天照大神の弟で、今冬の種をまき、放浪者の典型となった激烈な須佐之男命の神話から、学者平賀源内や農本主義の思想家安藤昌益のような十八世紀の偉大なる「否定者」たち、平和的ユートピア主義者、女権運動の先駆者たち、そして戦後の「無頼派」の作家たちは、強靱な異議申し立ての血統である。歴史家の家永三郎によれば、「否定の論理」は室町時代以降の日本の歴史の地下水脈をなし、キリスト教の教義と社会主義的な思想の影響の下、明治以後に刷新されたものである。西欧との接触によって、ある種の行動が「理想主義に感染」し、ことに知識人たちの間に、社会の中で不安定な場所にいるという新たな疎外感が生まれた。ジレンマを芸術の奥義において昇華させたものもあれば、日本的イマジネールの豊かな水脈である虚無主義に沈む者もあった。こうした「逃亡奴隷意識」によって自死の慣行は変容を蒙り、精神的な戦いの一部となり、「本質的な幻滅のしるし」となったのであった。また社会と和解し、規範に

適応しようと努める者たちもあった。しかし、拒絶、抵抗、不服従は単に知識人だけのものではなかった。普通の名もなき人々も、私的なものであることが多いが、彼らなりの方法とレベルで、様々な形で社会秩序に異議申し立てをしようと立ち上がった。

拒絶は日本人の心性に根付いているものであり、そこから民衆的想像力は幾多の徳を結晶化させた。拒絶は、権威に異議申し立てするものであるとして、世間では責められる態度であるが、ヒロイックな性格もまとっている。反抗者、挫折者、追放者は庶民の憧れのアンチヒーローである。それは、実在および架空の一時には実在でもありフィクションでもある。それほど伝説は歴史の肩代わりをしてきた——連の人物たちが示している通りであり、彼らは既存の秩序に反抗してきたのである。往々にして、こうした人物たちの悲壮さが際立つのは、まさに彼らの挫折によってであった⁴⁴。

⁴⁴ 『裏社会の日本史』347－348頁。《L'histoire du Japon est traversée de révoltes, de rébellions, de contestations collectives ou individuelles. L'archipel est aussi peuplé d'insoumis. Du mythe de l'impétueux Susanoo no mikoto, frère de la divinité du Soleil, Amaterasu no ōmikami, qui fut chassé du monde céleste pour y avoir semé le désordre et deviendra la figure archétypale de l'errant, aux grande «négateurs» du XVIII^e siècle, tels que le savant Hiraga Gennai ou le penseur néo-confucéen Andō-Shōeki, en passant par les utopistes pacifistes, les premières combattantes du féminisme ou les écrivains de l'«école des voyous» au lendemain de la guerre, court un tenace *filum* contestataire: une «logique de la négation», selon l'historien Ienaga Saburō, qui constitue une constance souterraine de l'histoires nipponne depuis l'époque Muromachi et se renouvellera après Meiji sous l'influence du message chrétien et des idées socialistes. Le contact avec l'Occident «contamina d'idéalisme» certaines conduites en faisant naître, en particulier chez les intellectuels, un sentiment nouveau d'aliénation qui les plaça en porte-à-faux dans la société. Pour les uns, le dilemme se résolut dans le repli sur l'art, tandis que d'autres sombrèrent dans un nihilisme qui fut une veine féconde de l'imaginaire japonais. Cette «conscience de fuite de enchaînés» (*tōbō dorei ishiki*) bouleversa les pratiques de la mort volontaire en l'intégrant à un combat spirituel pour faire «la preuve d'une désillusion essentielle». Les autres cherchèrent à se réconcilier avec la société, à se conformer à ses normes. Mais le refus, la résistance ou l'insoumission ne sont pas le fait des seuls intellectuels. A leur manière et à leur niveau, des hommes ordinaires, anonymes, se sont, eux aussi, dressés pour récuser sous une forme ou sous une autre, souvent individuelle, l'ordre social.

Le refus est une attitude enracinée dans la mentalité japonaise et sur laquelle l'imaginaire populaire a cristallisé des vertus. Une attitude condamnée par la société en ce qu'elle conteste l'autorité, mais qui n'en revêt que davantage un caractère héroïque. Le rebelle, le déchu, le banni, l'errant sont des anti-héros vénérés du petit peuple, comme en témoigne la lignée de personnages réels ou fictifs—et quelquefois les deux à la fois, tant la légende s'est substituée à l'histoire—qui se sont élevés contre l'ordre établi. Bien souvent, c'est leur échec même qui rehaussera le pathétique de leur figure.》(MC, pp.527-528)

このようにポンスは、日本における「まつろわぬ者たち」の歴史を総括しているわけであるが、まことに壮大な精神的パノラマである。こうしたパノラマは、専門の細分化されたアカデミズムの世界からは、提出され難いものであろう⁴⁵。本書の夥しい注記⁴⁶や引用を見れば、高度に専門的な文献も含め、ポンスがいかに多くの書物を読み解いたかは明らかだが、細部をないがしろにせず、これだけのパノラマを描きえた力量は端倪すべからざるものである。

こうしてパノラマを提示した後、ポンスは一步引き、「やくざ」現象の全てを「反抗」や「拒絶」の文脈に押し込めるものではないことを冷静に見据え、以下のように書き付けている。

やくざを反抗者と見なせるだろうか。映画は「やくざ」によって、最後まで自らの宿命を完遂する拒絶の人物を理想化した。しかし、やくざは、現実よりも民衆の想像力の中で、一層やくざ然としているのである。やくざは「極道」を一種の実存的選択とすることができたのであり、かつては異議申し立てのために暴力を行使した匪賊でもあったが、いまや、社会秩序に異議を申し立てているのではない。彼らは法を拒むが、社会を変革しようとしているわけでも、社会に背を向けているわけでもない。彼らの目的は富を篡奪することであり、日常的に行っているのは、暴力と脅しと社会的寄生である。一時期、義賊が存在したのは、無法者たちが主力勢力と戦っていたからというより、主流勢力の側にあったからなのである。やくざは、日雇労働者を仕切り、利用し、またスト破りに手下を送り込んだりすることによって、社会の浮動層の「導き手」の役割を果たした。当局の管理をすりぬけるような境界的な社会空間を管理する一種の権利の代理という地位を手にし、やくざは裏の警察の役割を果たしているのであり、日本は、ミシェル・フーコーが権力によ

⁴⁵ 訳出にあたって筆者は、特に馴染みの薄い江戸期に限定して、訳語の選定や事実の掌握に誤解がないかチェックを依頼すべく、旧知の日本史研究者に連絡したが、「それだけの範囲に責任を持つ専門家は存在しないし、そのような書物は出版しても取り合う意義のないものである。」との返答を頂くことになった。外国人であることを大義名分として、一次資料に基づかず、二次的文献を読み合わせることで安易に日本の歴史的図式を描く一部の研究者の仕事への疑念が会話から察せられた。本書は市井の読書人を念頭において書かれたものであること、筆者の調査の限りで、引用された文献は正確に読解されていることが確認され、学術的な検討にも堪えたと判断された。外国人であり研究者的資質を持つジャーナリストであるという立場が、このような壮大な日本の精神的パノラマを描くにあたって有効だったと言えるであろう。

⁴⁶ フランス語原著は、各ページに脚注の形で掲載されているが、邦訳においては巻末に2段組みで収められており、その分量は43ページに及ぶ。

る「非合法の植民地化」と呼ぶものの典型例なのである⁴⁷。

このようにポンスは、規範と逸脱、権力と反権力といった関係性の力学について述べると共に、既存権力を利用して横暴を働くことと、「拒絶」や「反抗」の精神を持つこととを峻別している。ポンスが精神的価値として救出したかったのは、あくまで「拒絶」と「反抗」の精神だったのである。

ところで、雄渾なる結論部には触れられていないが、第二部の終盤には、やさしい風来坊、テキヤ（これもポンスの定義する「能動的周縁」の一例である）の「寅さん」や、テキヤの仕切る祭りや縁日の郷愁を誘う賑わいについてさりげなく触れられた部分⁴⁸があり、終始苛烈な記述の続く本書の中で、唯一束の間の安逸を与えてくれる。テキヤは「掟破りの身分を力へと転化させる」タイプのハードなやくざとは趣きを異にしており、周縁的存在である「やくざ」よりも立場が脆弱かつ浮動的で、いかにもしがない存在である。しがないが、ささやかな庶民的娯楽や芸能に結びついていもいる存在である。テキヤの記述にいたって我々は、中心と周縁という権力的関係生成の無常を知らされるように思う。「ある人が、中心に居るか、周縁に置かれるかは、所詮偶然によるもの。浮世は夢。」そのような声が聞こえてきそうである。テキヤに関するいかにも長閑でほのぼのとした記述を読むとき、我々は、自分自身の内面にも伏在する周縁的なものへの傾きに気づかされ、様々な周縁の人々を全く無縁な他者だとは思われなく

⁴⁷ 『裏社会の日本史』348頁。《Peut-on faire du voyou un rebelle? Le cinéma a idéalisé avec le *yakuza* le personnage de l'homme du refus qui accomplit son destin jusqu'à l'acte final. Mais le truand l'est davantage dans l'imaginaire populaire que dans la réalité. Des voyous ont pu faire de la «voie extrême» une sorte de choix existentiel et il y eut autrefois des bandits qui mettaient leur violence au service de la contestation, mais, en règle générale, le truand ne conteste pas l'ordre social: il refuse les lois mais ne cherche pas à changer la société, ni à lui tourner le dos. Son objectif est d'accaparer la richesse, et ses pratiques ordinaires sont la violence, l'intimidation et le parasitisme social. Si l'on a pu parler, à certaines périodes, de banditisme social, le hors-la-loi a été du côté des forces dominantes plus qu'il ne les a combattues. Les *yakuza* furent des «canaliseurs» des couches flottantes de la population, en encadrant et en exploitant la main-d'oeuvre journalier et en réalité de la population, en encadrant et en exploitant la main d'oeuvre journalière et en fournissant des hommes de main contre les grévistes. Bénéficiant d'une sorte de délégation du pouvoir pour gérer les espaces sociaux liminaires qui échappaient à son contrôle, la pègre, joua un rôle de police clandestine et le Japon fut un cas d'école de ce que Michel Foucort nomme la «colonisation de l'illégalisme» par le pouvoir.》(MC, p.529)

⁴⁸ MC, pp.473-490

なるのではないだろうか。結論部にこそ取り込まれていないが、この忘れられた日溜りのようなテキヤの記述は、まるでロラン・バルトの言う *le neutre* 「中性的なるもの」(すべての対立するものの和解) のように、鈍く我々の情緒に痕跡を留めるように思われる。

本論のような限られた紙幅で、克明な歴史記述の積み重ねを伴う *Misère et crime au Japon* の論点を尽くすことはできなかったが、ポンスがいかなる実存的関心に導かれて本書をものしたか、また日本の周縁的な現象に対しどのような眼差しを向けてきたか、そしてそれがどのような人間理解に繋がっているかに焦点を当てて考察してきた。ポンスの記述のかなり長い引用も厭わなかったのは、眼差しのありようは文体にこそ表れると考えてのことである。本書において展開された日本という異郷に住まう者による日本の周縁的存在の探求には、実存的という他ない位相が含まれている。ポンスは結論部において、本書執筆の試みを「人間の条件の最も暗鬱なる領域にまで至る「暗部」への探訪⁴⁹」と呼んでいるが、こうした試みの意味することについて、何らか読者の理解が得られたことを願いつつ、筆を措くこととする。

⁴⁹ 《cette traversée du «sous-bois social» qui nous a conduits jusqu'aux contrées les plus sombres de la condition humaine》(MC, p.525)